

称名院集（公条）

蛩

百

飛ぶ蛩たれを待つとか短よの

更行くままにおもひそふらん

百

恋せじのしるしなしとや蛩すら

みそぎ川原にもえて行くらん

秋風の吹くとも見えぬ半天に

いかにみだるるほたるなるらん

雨中螢

思ひにはもゆとばかりの螢にも
涙をそふるよひの雨かな

夕螢

三十首

空はまだみねこす月の夕やみの
光をちらしとぶ螢かな

螢知夜

とぶほたる夜の間の光ほのぼのと
明行く空にきえむとやする

野亭螢火

永正六御着

月くらき野中の松のかげの庵
光もありと行くほたるかな

水上蛭

風にきえぬ思ひはたえず流れ行く

水にももえて飛ぶほたるかな

水辺蛭

多武峰法樂

おもひただけたむ物ともしら波に

光ながれて行くほたるかな

資直道堅三十首和

ながれては蛭もいくよ水の淡

うたかた消えぬみをくだくらん

鵜河蛭

御着

鵜舟さす波にみだれて行く蛭

これもやみぢを何したふらん

窓螢

御着

ならべてはいつか見るべき枝の雪を
しらぬ螢の窓の光に

螢火透簾

天文七十三首

行く螢すだれうごかし秋風も
吹きいるばかり影のすずしさ

叢螢

百

夏ふかき草ばにまじるむらすすき
ほに出づる影はとぶ螢かな

天千

露ふかく下草くちぬるくさむらを
かれなでちかく飛ぶほたるかな

草虫似露

下草の朽葉にわきておく露や

ほたるとなりて光みすらん

虫似玉

百

つつめどもたれをみぬめの涙とて

ほたるは袖の玉とちるらん

晩夏虫

永正十二三十三首

すずしくも空に暮行く夏の日の

光たかくもとぶほたるかな

秋ちかくなり行く空の風の色を

光にみせて飛ぶほたるかな

窓前栽竹

枝の雪ほたるあつむる窓の前

夏冬かくす竹つゑてみむ

「国歌大観」より